

●高澤良一 第十一句集 石鏡

●四月―六月

墨堤の浮浪者に湧く朝ざくら
飛花当る雪洞舟和の芋ようかん
キキと舌焦げむばかりの囀りや
平日の山のさくらを一人占め
花疲れまくりしシャツの袖おろす
しばし居る木椅子は花のつめたさに
横須賀の海に張り出す木の芽山
山鳥の呂律に合はせ花の散る
平日の桜の中を通りけり
里山の下り口三つさくら季
烈風にどうするどうする山桜
花冷えのしんしん山鳥黙すとき
蛇口より水迸り朝ざくら
花見弁当ひらけば鳩の優しく寄る
里山の見馴れたる景芽吹けるか
谷戸住みの醍醐味は是花吹雪
水道で洗ふ掌赤し初ざくら
花なんぞ見向きもせざる畑鴉
すかんぽや女はとかくがやがやと
田蛙のけくけく啼くは先がけ組
春水に小鷺の臍の惚れ惚れと
真昼間の生唾のんで照花菜
遠く見し菜の花を今至近距離
田の底の朽葉に蝌蚪の身を寄せて
こどもごゑ生々木五倍子生ふ山に
桃の咲く畑の縁に道付いて
畑の昼菜の花いろの尿をして
桜狩たふんと水筒背に鳴りて
根っこより見上げ端山の大桜

馬の背みち山の桜はまばらが佳し
蠅生る家にぶらぶらしてゐては
沿線の花見切符を撫しながら
地下街で稲荷購ひ桜狩
ドラエもん映画ねだられ春休
なずな季田沼の通夜は泊りがけ
青む麦こんなに早く逝くなんて
もう一度呼び掛け暮春の枢窓
花冷えの底出棺の釘打たる
花の昼人を焼く間の腹ごしらえ
紫木蓮もくもくと日を送るのみ
米寿母の云へるまで生きたついでの花見せむ
花吹雪易者は八卦うち振りて
明日雨の予報に繰り出す花の人
日曜の花散らす雨罪作り
花の日々御飯ふつくら炊きあがり
花筏日を経し彩を泛かべをり
朝寝して通勤の日を遠くせり
いつ見ても櫛の芽吹きへんてこりん
気安く咲き気安く散りし桃なりき
夕暮を呼び出してゐる白山吹
洗濯物掲げ出づれば春の星
大人しくしてゐる春の蠅でなし
匙をもち苺をつぶすこと一途
紙碑として一集編むや暮の春
とろとろと木の芽明りの甘茶仏
ゲートボール春昼をなほ単調に
今月は西にしむ向むくさむらい士ひ 四月盡
あはあはと暮春の落の炊き合はせ
戒名をノートに控え春の暮
松の芯浪うらうらと寄せにけり

ユリの木植え街もモダンに人もモダンに
緑雨齋藤緑雨の忌コラムニストが取り上げて

毒舌家齋藤緑雨の忌なりけり

大道芸立見燕野毛大道祭が頭を掠め

南風に載せジャズ風ちんどんミュージック

大道芸川端柳吹かる辺に

南風吹き抜け野毛の縁台将棋かな

薄暑の野毛髯のチャップリン笑ひ集とる

大道芸ネタを小出しに野毛薄暑

風船より軽き身ごなし大道芸

炭酸水ハヤシライスの木村屋にて

南風の中パントマイムのはじまりはじまりー

野毛の祭当たり馬券のやうな空

皐月賞ある日の野毛の酔っ払ひ

はがき書く皐月の水性ボールペン

青あらし通るところが判りけり

青梅雨のくどきチラシにくどき彩

グラビヤの五月の暦ガレー船

逗子駅前ああやっぱりと燕見き

目の粗きフェンスを潜り梅雨雀

萍に吾が空けし穴もう塞がる

酒は会津肴は三浦初かつを

酒酌むや鯉山椒に会津っぽ

退け時の一年生過ぐ桜の実

つつかける雨に処置なし青あらし

赤鼻のピエロー礼五月空

広辞苑割れば新緑殺到す

ジャスミンの芬々馬鹿に蒸す日かな

青芝を蜥蜴は泳ぐやうにして

連休は何處へも行かず柏餅

一夜干し烏賊のカーテン風岬

連休の二日目若葉曇りかな

毎度の静岡、庵原郡 影島智子さんことかたじけなくも新茶かな

蝸牛連休出歩く当てもなく

ペット屋にざりがに入荷五連休

東京のつつじといへば根津権現

蝸牛課題は生活習慣病

楠の花咲いて薄暮を募らしむ

菖蒲湯に貝の切り傷いたく沁み

人怖じせぬ雀皐月の鳩に伍し

楠の花水屋に水のおふれをり

メモ書きの押さえに皐月の醤油壘

衣更へてたよりなき襟掻き合はせ

棕櫚の花生々垂れて負け惜しみ

柏餅人物談義言ひ得て妙

若葉して青葉す杜に神在ます

十匹で何んぼの和金売れゆきよし

閉じてまた開く金魚の口可愛しめぐ

麦畑を追はれ鴉の減らず口

菖蒲湯の菖蒲に倣ひ横たはる

はおるもの一枚足せと梅雨予報

鉛筆は2Bが好きこともの日

古茶淹れて七番日記続き読む

停車してホームが足らず麦畑

人焼ける畑麦畑からからに

何だろと見上げて朴の残り花

朝顔蒔く穴ぼこに種子一つづゝ

朝顔種子浸すに休眠するやつも

遊園地若葉風切る複葉機

ひめじょおん作り込まない庭が好き

海鞆料る妻は手馴れたものである

くるぶしをぶつつけおお痛甚平着

蠅虎稚くも貌老成す
お氣に入り房州団扇使ひ初め
街往けば正面からくる青あらし
青嵐煽られし身を立て直す
しよぼくれし灯に床延べる梅雨疊
ふっ切らむ老いのしよぼくれ森林浴
コスモスの種を蒔きをり細目して
角々を確かめありく卓の蟻
ほおづき縁日近し愛宕の杜冥く
夏草の文なす皇居内ポスト
二重橋柳丸々松亭々
ヤットウの皇宮警察森若葉
神奈川の縣花尋ねて崎山に
螢袋山土蒸れし香を放ち
馬刀葉椎みどり溶け込む油壺
三浦半島 小網代湾
小網代湾蟹の棲み分け聞く干潟
甘藪場に甲烏賊の寄る夏近し
浜大根何處から降りても小網代湾
コメツキ蟹健啖にして砂団子
茱萸をもぐ女の腕の種痘跡
小網代の森の育てし赤手蟹
川蜻蛉飛んで翅色薄めけり
穴掘れり森の隠者の赤手蟹
チゴ蟹の小心者に芦の風
チゴ蟹の万歳小旗持たせし
ロンパリの蟹の目干潟観察会
茉莉花に皆鼻持ってゆきにけり
煮冷ましの茄子汁底なし沼めける
立読みも堂に入りたる甚平着
夏潮の煌めき寄する国府津駅
緋カンナに国府津の海の展けたる

国府津駅 蓑ふかすに片陰無し
瑞々しき水木花 挙ぐ塔ノ沢
濃あぢさゐ 登山電車はぎくしゃくし
素箱根湿生花園つびんのノハナシ ヨウブに逢ふ水辺
山妻にノハナシ ヨウブの季ときありし
繡線菊見る 目元もやもやしてきたる
極めつけ タカネグンナイ フウロかな
繡線菊の盛り過ぎしはピンぼけに
お弁当ニツコウキスゲに向き合ひて
霧湧かす花別名をゼンテイカ
もう一声 葎切あらぬところより
葎切は 詭弁を弄す如くなり
青すすき道をいっぽん通しけり
青すすき 仙石原は風に富み
ラムネ玉ころりと仙石原晴れて
郭公に得したやうな顔をせり
足どりのどんどん 軽くなる郭公
水木咲く 青山箱根 宮城野温泉会館にして温泉ゆの湧ける
万緑の中の一川 ルアー釣
ルアー釣 箱根のみどり映す水
弥次喜多の湯とや燕に軒を貸し
泰山木花の始末をだうつける
夕燕揚げて時報は「箱根山」
弥坂湯に箱根巡りの汗ながす
連歌師早雲寺の墓を常磐木 落葉搏ち
あらがねの光放てり 泰山木
ひるがほは時間を湛えゐるごとし
萍は一つから殖ゆその一つ
筋通すことが第一 今年竹
湯上がりの手首の赤し 鯉時
書き損じくしゃくしゃにして 紅緑忌

目の合へば少しどきまぎして守宮
大玻璃戸守宮の吸盤護謨仕立て